

戦後文法教育理論形成過程の研究

——教科研文法の場合——

佐 藤 有

はじめに

日本の教育をふりかえるとき、公の初等・中等教育における現代日本語の文法教育には二つの問題が存在しつづけている。その一つは、いわゆる学校文法が現代日本語の文法構造を正しく映し出したものではないことである。いま一つは、とりわけ初等教育においては、系統的な指導が認められていないことである。

中等教育においては、1931年の中学校教授要目の改正にともない、「口語文法」がようやく本格的に教授されるようになった。それ以来、戦後の表記法改革そして教育制度改革を経た今日に至るまで、基本的に橋本進吉の文法がいわゆる学校文法の主流を占めている。それは口語文法とはいっても、文語文法の基準にてらし合わせてつくられたものであり、文語文法への「橋わたし」として位置づけられるものであった。したがって、真の意味で口語の文法を映し出したものではなかった。また教育内容はそのほとんどが品詞論と活用論であり、そこにこそ、「国語の構造及特質」があると考えられていた。そのような文法が、旧制中学校では体系的に、戦後の新制中学校では機能的に指導されてきたのである。初等教育においては、文法指導は戦前から戦後を通して、表現・理解といった言語活動に付随しておこなわれてきた。戦後の小・中学校における文法は機会をみつけて機能的に指導されることから、「機能文法」として知られている。

戦後、今日まで、小・中学校において文法教育が教育課程上、正しい位置づけが与えられてこなかったその一つの背景として、古文への「橋わたし」とし

ての解釈文法を教えたところで、読み・書きといった言語活動にあまり役に立たないという認識があることは否定できない。しかし、現在、学校教育の中で、橋本文法に代わる公認された文法論は、出されていない。逆に、橋本の文法論を守り、その弱点を補強するものとして時枝文法がおし出されている。また、言語活動の力を伸ばす文法がなかったということと関係して、特に文法を教えなくても子どもはおとなになるまでに、読み・書きができるようになるという認識もあることも否定できない。自分は日本語の文法は知らないが、読み・書きの言語活動に不自由しない。だから子どもも、といった思いこみである。そのような認識からは、母国語である日本語の体系的・系統的な文法知識を、子どもたちに与えようという考えは生まれにくい。

現在の日本語は、ながい歴史の中で形づくられ、洗練されてきたもので、その内容も豊かで複雑である。そのような日本語は、言語活動的なやり方だけでは、子どもたちに教えきれるものではない。学校教育は、すべての子どもたちが正しく日本語を使いこなすことができるようになるために、科学的な方法をとらなければならない。そのためには、日本語についての体系的・系統的な指導を通して、日常的に、経験的に使用している日本語を、子どもたちに対象化させることによって、母国語についての意識的な知識を与えることが必要なのである。

すぐれた科学の成果があり、それを教師がわがものとし、その教師によって子どもたちがそれを獲得するならば、かれらの言語活動の能力は確実に伸びるであろう。

ところが現在、学校文法の内容は、構文法としては、主述の照応、修飾と被修飾、陳述性の呼応だけにとどまっている。また、形態論としては、助詞・助動詞に文法的な役わりを与えることによって、現代語の文法を構造的に映し出すことに失敗している。それにもかかわらず、文部省は文法が「表現」と「理解」とに役立つことを要請している。したがって、学校文法を守り通すということと、「表現」「理解」に役立たせるということとの間に矛盾が生じている。さらに、文部省は文法の体系的な指導法を認めていない。しかし、もともと文法というものは構造を形づくり、体系性をもつ質のものである。そのような文

法を、機能的に指導することは、内容と方法との間の矛盾でもある。

これらの矛盾は現場の教師を悩ましてきた。

戦後、一貫して、小学校からの系統的な文法教育を主張し、独自の文法理論を提出しつつ実践をかさねてきた民間の研究団体として、教育科学研究会・国語部会（以下、「教科研国語部会」とよぶ）をあげることができる。この部会の文法教育の実践は、戦後の文法教育への批判から出発しているものの、内容的には単に戦後のそれを越えて、明治以降の文法教育ならびに言語政策を貫く基本的な言語観の批判にも向けられている。

教科研・国語部会は、全国の教師たちに、文法教育の目的・内容・方法などについての指針を示して、多大な影響を与えてきた。この部会の文法が広く世に知られるようになったのは、『文法教育 その内容と方法』（1963年）を経た『にっぽんご』シリーズを通してである。しかしながら、1950年代の早い時期に、既に、その文法理論の原初的なものが出され、1958年頃までにはその骨格が構築されていたというのが、著者の考えである。

また、教科研の文法理論が戦後どのような学風の中でその成立過程の準備がなされたのか、またその文法理論の成立過程の開始は何を機動力としてなされたのか、さらには、どのような蓄積された先行研究から学び、理論を構築したのか、そしてその文法理論は、日本の教育史上、また、文化史上どのような意義をもつのか、といったことはまだ明らかにされていない。それは、教科研の文法理論の形成過程を明らかにする研究に属する。

教科研の文法理論の形成過程を吟味することによりその理論の原形を明らかにすることは、文部省周辺の言語観・文法観の原形をも明らかにすることに連なる。民間側の理論は、文部省の文法教育のあり方への批判・反省を通して成立しているという一側面をもつっているからである。

教科研の文法理論の骨格は、形態論、連語論、構文論の三分野から成立している。しかし、この小論では、対象を形態論の形成過程に限定する。その理由は、三分野の中で形態論についての理論化が、最も早い時期におこなわれ、しかも、教授学的なレベルでの研究も、最も進んでいるからである。

この小論は、日本文法教育史上における教科研文法の歴史的立場を明らかに

しょうとする試みの一作業である。また、教育内容・方法の研究（教科・教育課程の研究）を進める上での一作業でもある。

1. 教科研文法理論の温床……民主主義科学者協会言語科学部会の学風

民主主義科学者協会（以下、「民科」とよぶ）は1947年5月に言語部会を設立した①。この部会は、他の諸部会同様、「民主主義革命」のために、言語という領域から科学運動をおし進めること、具体的には、「民主主義革命」に役立つ、現実的な日本語学の建設を志向して創られた②。つまり、日本語学と日本人の言語生活における民主化ということを、統一的に捉えようとしていたのである。したがって、新しい日本語学の創造と、戦後の一連の国語国字問題ならびにその運動のおし進めということは、民科言語部会に集まる多くの人たちにとっては、重要な課題の一つであった。

当時、日本の国語学会で支配的な力をもっていたのは時枝誠記であった。氏の説く独自の言語理論は言語過程説とよばれるものである。それは、言語の本質を、言語主体の意識に強く求めるものであった。その帰結として、氏は、言語のもつ社会性に対して、言語主体の心的（精神的）過程としての言語を強調する一方、他方では戦後の国語国字運動に対しては一貫して否定的な姿勢をとり、国語国字問題における「保守的な勢力」の支えとなっていた③。

そうした時枝学に対して、民科言語部会内部では批判的であったものの、理論的克服はされていなかった。そのような状況を打ち破ったのが、スターリンの論文「言語学におけるマルクス主義について」（1950・6）であった。それは言語の超階級性をとりあげたものであった。そういった言語観は、近代言語学では常識的なことであった。しかし、それは言語と社会・階級・民族との関係を、社会科学的に捉えようとしたところに新しさがあった。そのことは、当時の日本民族の危機という新たな情勢のもとで言語学の分野で現実と対決しようとする部会員に対して、たんに言語生活の民主化ということに留まらずに、民族のこゝろとしての日本語への自覚をうながし、決定的な影響を与えることになった。この論文の日本への紹介によって、言語部会内部の研究活動は急速に

活発化したのであった。

スターリン論文に対して、言語学者として日本で最初に批判的論評をおこなったのは時枝誠記である(『中央公論』1950年秋季特別号)。以下、時枝のスターリン批判をみていく。

スターリンは、一国の国語④は常に階級的に分裂していて単一、共通の、国民的・非階級的国語は存在しないというマール学派の主張に対して、それはまちがっていると批判している。その理由として、国語の「圧倒的大多数の単語と文法構造はやはり全人民的民族語よりとっている」⑤ことをあげている。これに対して、時枝は「もしこの論理が許されるならば、すべての日本画は、線と色彩を同じやうに用ゐることによって皆同一であるといふことが出来る筈である。」⑥と批判を試みている。時枝は、言語も日本画もともに主体によって表現され、理解されるという共通性をもつというレヴェルの枠組みで、言語と日本画とを同一なものとして扱っている。しかし、言語には言語の独自性があり、日本画には日本画の独自性があるのである。そしてそれらの独自性こそが重要なのである。

また、スターリンは言語が人びとの交通、思想交換、相互理解の手段であり用具であること、共通の言語の存在によって初めて社会の生産活動がいとなまれ、社会の存続が可能であると述べている。これに対して、時枝は「言語が社会の共通の用具として存在するといふことは、極めて比喩的に、或は特別の条件を付して承認出来ることであって、実際は、言語は社会成員の個々の主体的活動としてのみ成立することが出来るものである。」⑦と批判をしている。

以上の、スターリンに対する時枝の批判は、「言語は言語主体の表現行為であり、この表現過程そのものに於いて言語を見ようとする」⑧氏の言語観から出ていることは確かである。

同年9月30日に、民科東京支部主催によって、シンポジウム「言語、民族、歴史——スターリンの言語論を中心に」が、東大でもたれている。このシンポジウムの「報告要旨書」⑨には、大島義夫・三浦つとむ(言語学)、石母田正(歴史学)、古在由重(哲学)の名があがっている。シンポジウムの論議で注目をひくのが、三浦つとむと大久保忠利との間でおこなわれた、スターリ

ソ論文の評価をめぐる「言語の本質論争」であった。この論争は、三浦が時枝の『中央公論』でのスターリン批判を支持しながら、スターリンの言語論を「きわめて古くさい見解」^⑩ としりぞけたのに対し、大久保はソシユール言語学に立ちながら、スターリンの言語論を支持するといった形でなされた。

三浦と大久保との間の論争を第一の「言語の本質論争」とするならば、第二の「言語の本質論争」は大久保と、三浦が理論的に依拠する時枝そのものとの間の論争であった。大久保と時枝との論争は、『民科研究ニュース No.5』（1951年3月）と『文学』（1951年6月号、9月号）の上でおこなわれたが、これはスターリン言語論をめぐる議論とわかちがたく結びつきながらも、大久保がソシユール学徒であったことと、時枝が自分の「言語過程説」をソシユール学批判の上に形づくったということから、ソシユール学をどのように評価するのかということに力点が置かれて展開された。大久保は、ソシユールのラングの概念をまもり、それを「社会ラング」と「個人ラング」とに分類し、「社会ラング」にこそ言語の本質である社会性があるとする。したがって、言語学の研究対象は「社会ラング」にあるとして、時枝学の独断性を批判している。これに対して時枝は、言語の本質を表現・理解といった主体的な活動そのものと規定する。（これはソシユールの言語活動と同じもの。）そして、ソシユールのように「言語構成観」に立って、言語を自然科学的方法でとらえるやり方では真の言語研究はできないと批判している。

しかしながら、大久保は「社会ラング」を立てながらも、結局、日本語の現象を日本語そのものの構造や法則で説明することをしないで、それを論理の法則と心理の法則で説明し、時枝も言語を主体的活動それ自体と定義するものの、結局は言語の法則を主体的意識に求めるという矛盾をおかしている^⑪。

したがって、結果的には三浦と大久保、そして大久保と時枝の間の「言語本質論争」は、ともに抽象論におわってしまった。

このように、1950年、51年はまさに混乱の時期であった。しかしながら、民科言語部会に集まる多くの人たちは、強くスターリン論文を支持したのである^⑫。当時、スターリン論文に賛同する論文は実に多く書かれている。民科言語部会内部では、時枝学はもっとも弱い存在となったのである。

1952年に入ると言語部会の研究活動は、それまでとは質的に異なるものになった。

民科は52年5月の第七回全国大会で、「国民的科学の創造と普及」というスローガンのもとで、「国民的科学」論を方針にとりあげている。「国民的科学」の中身の説明としては、一般に、その用語の使いだし手である、石母田正の『続・歴史と民族の発見』が引かれる。それは、「われわれは『国民的科学』という言葉でもって、今のべたような民族解放と、民主革命の偉大な事業に奉仕し、その事業の一部であるような学問を意味しているのであります。」^⑩とか、「『国民的科学』の創造とは、日本人が民族解放と民主革命の方向に一步一步前進する過程において創造される科学であり、国民の解放のたたかいのなかに武器として存在するような科学であります。それは、そのために必要な一切の国際的な科学と理論の成果を吸収せねばなりません。それは国際的科学から孤立したものでなく、その反対であり、伝統の学問との中断でなく、その批判と継承であります^⑪」といったものであった。

スターリン論文が日本に紹介されたのは1950年6月であるが、同じ6月にはトルーマンによる朝鮮出兵声明が出されていた。そして51年9月には、サンフランシスコ条約ならびに日米安保条約が調印されたのであった。このような状況にあって、日本民族の独立と解放の課題は、民科に集まる多くの人たちに深く認識されていた。それらの課題を解決するために、それぞれの専門とする研究分野から貢献しようとする試みが、「国民的科学」論によって具体化されたのである。

言語部会の多くの人たちは、スターリン論文にはげまされながら、他の部会の人たち同様、「国民的科学」を実践したのであった。

言語部会では、52年4月から共同研究の課題として「日本文法の確立」をとっている。共同研究という形で一つのテーマを追求しようとする試みは、研究スタイルの点でも注目に値することであるが、それはまた、部会が具体的に何をしなければならないのかということが明確になったことでもあった。さらに同年5月に、民科の正式方針として「国民的科学」論が採用されたことによって、部会内部の研究活動は活発化したのであった。

以上みてきたような、アカデミズム体制の国語学に対し国語国字運動をおし進め、新しい現実的な日本語学をつくりあげようとする民科言語部会の革新的な学風の中で、後に教科研文法をつくりあげる奥田靖雄、鈴木重幸、宮島達夫、野村篤司といった人たちは、自己の言語観を形成し、奥田を中心に結束し、現代日本語の研究を展開したのであった⑩。

2. 奥田靖雄の言語観

前節で大久保と時枝の論争に触れたが、時枝は大久保の批判に対して自己の立場（言語過程説）を改める必要は感じないと反論した。時枝のこの反論について、奥田は、言語部会の機関紙『コトバの科学』（1951年11月）で、独自の観点から時枝学批判を展開している（著者が知る限り、これは奥田の言語学に関する最初の論文である。）そこでは、奥田はヨーロッパの古典言語学の伝統に立ち、時枝の「言語過程説」という理論からおし出される二つの考え、すなわち、言語において音声（形式）と概念（内容）とを切り離す考えと、言語における個人的側面に極端なアクセントを置く考えについて批判をおこなっている。以下、奥田の時枝批判をみる。

時枝は、言語を「思想を導く水導管の様なものであって、形式のみあって全く無内容のもの⑪」と考えている。また、「事物」「概念」といったものを「就いて語られる素材⑫」と捉え、それらを「言語を構成する内部的な要素と見ることは出来ない⑬」とする。そして、「そこにこそ言語過程説の成立の根拠があるのであり、言語の本質もこの様な形式自体にあると考へなくてはならない。」⑭ とのべている。奥田は、この時枝の考えをとりあげ、つぎのように批判を加えている。時枝にあっては思想は言語という「形式」を抜きにして存在し、「形式としての言語」は、内容をもたないものと考えられている。つまり、「思想なき言語は考えられないとしても、言語なき思想は考えられる。」⑯ と。奥田は言語なしに思惟し、思想をもつことは不可能であること、つまり、言語と思想との密接な結びつきを主張しているのである。また、ことばとしての音声は、概念の存在形式であり、内容としての概念は、ことばとしての音声に支えられてい

ることを主張しているのである。奥田にあっては、音声（形式）なくして概念（内容）は存在しないのであり、また、逆も成立しないのである。

さらに、時枝は、言語の社会性に対して、言語の個人性を強く主張しているが、それに対して奥田はつぎのように批判している。認識活動にあっては、人間は感性的経験にもとづき、個物の本質的一般的特性を抜き出し、概念をかたちづくっていく。したがって、客観的外界をストレートに反映した「感性的認識」である「表象」は主観的なものである。それに対して、非感性的認識である概念は主観性から離れた客観的なものである。「表象から概念への移行は、単なる量的変化⑥」ではなくして「質の変化である。」⑦ 表象から概念への「飛躍は諸主観の関係をむすぶ社会において遂行されるのである。」⑧ と。

しかし、奥田の論文で重要なことは、氏がヨーロッパの古典言語学の伝統に立ち、言語を音声（形式）と概念（内容）の統一物と捉えたことであった。

これ以降、奥田は、表象に対して音声を与えられることにより言語が生じるのであるから、語いと文法から構成されている言語の研究の「手づききは音声的なものであり、音韻論の手づきこそ、言語発展の最初の段階とみなさねばならず、それゆえに、論理的体系としての言語学は音韻論をもつて、最初の環とみなさねばならない。」⑨ として、音韻論の研究に力を注ぐことになるのである。

奥田は、音韻論の研究を進める過程で、音韻論の対象として、「生きた言葉」である「はなしことば」を据えなければならないと主張するようになっている。そして、「言語活動、すなわち actual speech のうちに音インを見だそうとする⑩」E・サピアを支持する一方、心的実在としてのラングを音韻研究の対象と捉えるソシュールのやり方はまちがいだと批判している。

以上のプロセスを終て、奥田は1952年末に、日本における言語学の主観主義批判を展開している（「日本における言語学の展望と反省」『季刊理論・別冊Ⅱ・言語問題と民族問題』）。この論文は、奥田のそれまでの言語研究の総括であると同時に、氏の本格的な言語研究の出発を示すものであった。ここでは、それまでの奥田にはみられなかった、言語学と民族の問題を統一的に捉えようとする姿勢がはっきりと打ち出されている。また論文上の文章表現においても、

漢語、漢字の使用をできるだけおさえているし、文語的用法も止めて口語的用法を用いるようになっている⑩。

この論文にこそ、奥田言語学の原初的かつ本質的なものが内包されているのである。以下、奥田の主観主義批判の中から、奥田の言語観をみていく。

それまでの日本の言語学は、「なんらかの形でみな主観主義的な立場に立っている。」⑪そして、それを理論的に支えているのがソシール言語学である。そうした認識のもとに、奥田は、日本の言語学はソシール学の批判・克服から出発しなければならないと、主張したのである。この批判・克服とは、ソシールのラングの否定を意味し、しかもそのことは、橋本進吉、時枝誠記、服部四郎、大久保忠利といった人たちの言語学に対する批判をも意味していた。

奥田は、ここで(1)言語の社会性と、(2)言語研究の対象・方法の二点からソシールのラングを批判し、その概念の設定の無意味性を主張している。

(1)について、奥田は「言語」はまったく社会的なものであることを主張している。ソシールが言語の社会性を説くとき、それはラングのことだけを指し、パロールを個人的なものとみなしている。これに対して奥田は、だが実際は、「話しコトバ（パロール）は、非言語的要素をのぞけば、どの点から見ても、社会的なものである。」⑫それは、「何よりも概念の形成が社会的なものであるからである。」⑬と批判している。したがって、奥田は、ソシールが言語活動をラングとパロールとに区分し、言語の社会性をラングにおいてのみ観るのはまちがっているという。つまり、言語は、ラングであろうとパロールであろうと、社会的なものであると主張するのである。

(2)について、奥田は研究の対象としてラングの代わりに「生きた」「はなしコトバ」を設定し、方法としては歴史的な方法を軸としながらも記述的方法も重んじることを主張している。

ソシールは、「ラング」とは聴覚映像と概念との結合であり、それは脳中に潜む心的実在であると定めている。奥田は、この考えをとりあげ、「形式としての聴覚映像であるラングは、研究者によって、どうしてとらえられるか⑭」と問い、「表象である聴覚映像は、音声の個人の頭脳への直接的な反映であるから、何らかのかたちで客観化されない限り、固定しないし、つかまえるわけ

にはいかない。」^⑩という。つまり、ラングを言語学の研究対象と定めたとしても、現実にはラングという対象を把握することは不可能であり、「言語学は成立しない^⑪」というのである。

またソシュールは、「ラング」は「聴覚映像の貯蓄であり、書がそれらの映像の・手を触れることのできる形態である^⑫」とも述べ、ラングとは実質的には文字の言語^{ことば}であることを述べている。これに対して、奥田は、脳中に心的に実在するラングを、文字と等しいものとみる見方には飛躍があると指摘する。この指摘は、ソシュールが言語活動^{ラングーージュ}を構成するものとして言と言語^{パロール ラング}とをあげながらも、ラングとは結局は、文字によって固定され、対象化されない限り、把握されない実在としておさえるとき、「langue は langage の部分ではなく、langage の外に位置している。」^⑬という、ソシュールがもつ矛盾の指摘に通じるものである。

以上の批判のうえに立って、奥田は、言語学の対象に、「認識活動の中で作りだされる発生的言語^⑭」である「私たちの（生きた—引用者）話しコトバ^⑮」そのものを据える。そうすることによって、「言語学は客観的な立場から言語に近づくことができる^⑯」というのである。そして「国民によって使われる現実のコトバは、常に発展してやまないもの^⑰」であるから、ソシュールのような静態的言語学であってはならず、言語学は歴史的立場に立脚しなければならないというのである。奥田は言語学とは「歴史—比較言語学であり、それは言語発展の法則を追求する科学^⑱」であると捉えていた。

しかし他方では、「はなしコトバ」という言語現象の形態のうちに「本質的なものを見ること^⑲」を強調し、「言語の構造^⑳」は「言語の内部に存在^㉑」することを主張している。奥田は言語の構造ということをも忘れてはいない。つまり、言語の歴史的発展過程の中で、言語の体系性をおさえることの重要性を主張しているのである。

さて、奥田はソシュール言語学を批判したわけであるが、その真のねらいは、日本における国語学の批判・変革にあった。奥田は言語学の対象として生きた「はなしコトバ」を唱えたわけだが、実はそのことは、当時の日本の国語国字問題や教育問題にとっても、今日のそれらの問題にとっても、きわめて重要な意

味をもつものであった。

ここでは、奥田の橋本進吉の音韻論に対する批判をとりあげてみる。

橋本は、「マッチ」(まっち)の「マッ」(まつ)は、音声事実としては一音節であるが、音韻としては二音節であると説明している。橋本は音声学と音韻論とをまったく別ものとして二元的に捉えているのである。橋本が音韻というとき、それは言語主体の言語意識が問題とされているのである。奥田は、橋本がこのように音韻論を言語意識のうちにみい出す傾向は、心理的実在としての言語のうちに音韻をみい出すソシュールの傾向と同じく、主観的なものであるとみなすのである。この奥田の主張の背後には、「音声は常に音韻であり、音韻は常に音声のうちに現象するのであるから、音声学は音韻の音声学的研究であり、音韻論は音声の音韻論研究である^⑧」といった、氏独自の言語観があることは確かである。

また、橋本が「マッチ」(まっち)の「マッ」(まつ)が二音節から成っているというとき、それは「まっち」の「まつ」という、歴史的仮名づかいの文字そのもの、または文字意識に注目していることはまちがいない。奥田は、この橋本の傾向をとりあげて、橋本の音韻論からは旧仮名づかいを改革するという思想は生まれてこないと批判する。そして、「私たちにとって重要なことは、現実の音声に忠実な文字制度をもつことである。それだから、また現実の音声に忠実な音声意識をもつことでもある。」^⑨と主張するのである。

奥田の橋本批判からも明らかなように、氏は単に言語学、国語学についての研究にとどまることなく、それらと国字問題とを統一的に捉えようとしたのであった。

また、奥田は、ヨーロッパにおける近代言語学とは、外部からの侵略に対しそれを防ぐために、国民の統一と団結とを計るという「国民的要求^⑩」から生まれたものであり、したがって、言語学はその「出発から『国民的科学^⑪』であった^⑫。」という認識をもっていた。つまり、言語問題と民族問題とを統一的に捉えようとしていた。

以下、奥田の言語観をまとめるとつぎのようになろう。

(1)言語においては、音声(形式)がないところには意味(内容)も存在しな

いし、逆に、意味（内容）のない音声（形式）はなく、両者は結合して初めて存在する。つまり、言語は音声（形式）と意味（内容）との統一物である。

(2) 言語学の研究対象として、「話しコトバ」を据える。

(3) 言語学は、言語の発展の法則を研究する歴史科学である。

(4) しかし、他方では、言語は、そのものの中に構造・体系性をもつ。

(5) 現実の音声に忠実な文字制度をもつべきこと。

(6) 言語の問題と民族の問題を統一して捉えようとした。

これらの、奥田の言語に対する姿勢は、みな、氏の文法理論研究の中にも貫ぬかれていくのである。

3. 教育科学研究会の文法理論の形成——奥田文法理論の出発

奥田の文法理論研究ならびに理論の発展は、教育ということと密接にかかわってなされた。氏の文法研究の出発を示す論文「単語について」（形態論）も、民科言語部会の一研究会である児童言語研究会（以下、「児童研」とよぶ）での研究成果として、雑誌『新しい教室』に載せられたのである。また、構文論上のカテゴリーである対象語・状況語・規定語が出されたのも、児童研での研究会でのことである。さらに、こんにち氏が専門とする連語論研究の萌芽が出されたのも、雑誌『教育』上でのことである。

(ア)・単語の認定について

奥田が文法を正面に据えて初じめて論たのは、論文「単語について」においてである^①。この論文は短いものではあるが、奥田文法の出発を示すものであると同時に、氏の文法理論の根本原理を提出しているという点で、重要なものである。これは、それまでの解釈文法が国語教育にも、文を書くのにもまったく役に立たないものである、という意識のもとに書かれた。奥田は、その役に立たない理由が、単語の認定の仕方の誤りにあると観た。その結果、江戸時代以来の伝統と、明治以降の学校教育でつちかわれて来た權威のもとに勢力を占めてきた解釈文法を批判するに至った。すなわち、国学では本居宣長の長子・本

居春庭の『^{ことばのやちまた}詞八衢^②』(1808年)、学校文法では大槻文彦の『言海』の付録である「語法指南^③」(1891年)、『広日本文典』、『同・別記』(1897年)以来、今日の橋本文法並びに時枝文法にいたる単語の認定法をくつがえす、新しい認定法を提出したのである。

奥田は、単語に対してつぎのような認識をもっていた。第一に言語の基本的な単位である単語の存在を承認すること、第二に言語においてはすべて単語をめぐって、又は単語を媒介にしながら進行すること、つまり、^{ことば}言語を考える上で単語は中心的位置を占めること、したがって、文法の研究は、まず、文の構成材料である単語とは何であるかを正しくおさえるところから出発すべきであると考えた。

文法研究にとって、単語と文の規定は、最も困難なものとされているが^④、奥田は文法の研究に単語の方から入ったのである。

奥田は、言語の最も基本的な単位である単語を、(a)文法的なもの(形式)と語[・]い[・]的[・]な[・]もの(意味)をなすものの統一体とおさえた^⑤。その帰結として、(b)解釈文法で助詞・助動詞とよばれていたものを、単語と認めず、原則として動詞・形容詞・形容動詞の内部の文法的な要素と認めたのであった。

このような独自の単語の認定法をうち出す上で、とりわけつぎの三点が重要な役割りを果たしたと考えられる。それは、第一に表音主義者であったこと、第二に言語学の対象として「はなしコトバ」を据えたこと、第三に言語は音(形式)と意味(内容)との統一物であると規定したことであった。

奥田は国語国字問題に関心をもち、「現実の音声に忠実な文字制度をもつこと^⑥」を主張する表音主義者であった。したがってローマ字を理想の文字とみなしていたが、現実の問題としては、かな文字運動を支持した。

奥田はかな文字を主張したが、その理由は、音韻論の立場からだけではなかった。そこには、漢語は「日本語をくいころす^⑦」という認識があった。つまり日本語を発展させるためには健全な日本語である、やまとことばを育てていかねばならないということである。また、文化・科学を扱った書物が、みな漢語でや漢字まじりの文で書かれて難しく、多くの日本人の文化や科学への高まりをおさえており、さらには、「民族のマトマリをぶちこわしている^⑧。」という

認識もあった。以上のことから、奥田は「国民的科学とは術語の体系から漢語をおいだす学問であるといっても、けっしてイイスギではありません。国民のコトバ（やまとコトバ＝引用者）で術語をつくり^⑩」ださなければならないと主張し、やまとことばの造語法の研究をおこなったのである。後の教科研文法用語となる「カザリ」「カザラレ」「スギサリ」「スギサラズ」といった名づけからも、そのことがうかがわれる。（普通、これらの用語は、修飾語、被修飾語、過去、現在といったことばで表現されることはいうまでもない。）氏は『正しい日本文の書き方』で、「文字のかきかた」の部を設けて、漢語から成っていることばや、漢語まじりのことばを、現代かな文字とできるだけ少ない漢字で、「やさしく」いい表すことを試みたのである^⑪。

国家を守護する→くにをまもる

四方を瞰下する→まわりをみおろす

しかし、奥田は、日本語を表音文字だけで書こうとする認識から必然的にわかち書きということを問題にする。わかち書きの問題は表記法（正書法）のレベルの問題ではあるが、言語の単位（単語）と関係があると考えられる。奥田は、わかち書きと単語との関係をつぎのように捉えていた^⑫。

日本人は、かきことばのなかで単語と単語とのあいだを、あけてかかない。つまり、わかちがきをやらないでべたがきをする。だから日本人は、一般に、単語についてまずしい感じとりしかもちあわせていない。このありさまが、国語学のなかに、もちこまれて、こんらんをまきおこしている。

奥田が、それまでの伝統的な国語学による単語の認め方に批判的であったことは確かである。

つぎに、奥田はフンボルトやサピアと同じように、言語の対象に「はなしコトバ」（現代語を）据えたわけだが、この姿勢は文法研究においても貫ぬかれている。何故ならば、「はなしコトバ」を問題にするということは、氏にあっては現代の日本の生きたことばを取り扱うことを意味しているからである。奥田は、生きたことばと単語との関係を、次のようにおさえている^⑬。

「《とも》という単語は、いま日本語では、それだけで、はなしのなかからわれない。このことばは《ともだち》という単語におきかえられた。だか

らはなしのうえでは、《とも》は、もはや単語ではない。ところが、《まなびのとも》とか《とものかい》とかいうようなことばのなかで、《とも》は、単語としてのいのちを、かろうじてたもっている。」

奥田は歴史的立場に立脚し、「《とも》」という単語が、「はなしコトバ」の中から減びつつあることをいっている。ここでいう、単語とは、生きた「はなしコトバ」の中に現われる具体的なことばなのである。解釈文法や学校文法が認める単語の中で、そのままの形では「はなしコトバ」の中に現われないという性質を一番多く持っているのは動詞・助動詞である。例えば、日本の伝統文法（解釈文法）や学校文法では、「あるこう」という語を、「あるこ」と「う」とに切り離し、前者を動詞、後者を助動詞とし、両者をそれぞれ独立した一単語として認めている。だが、奥田の論に従えば、「あるこ」とか「う」とかいった単語は、「はなしコトバ」の中には決してそのままの姿では現われず、両方が合わさった、「あるこう」という姿で現われる。従って、奥田は、「あるこう」こそが独立した一つの単語であると考えた。

奥田は、わかち書きに対する考えから、それまでの単語の認定法に対して疑問を持っていた。また、「はなしコトバ」こそ文法の研究対象であるという考えから、生きた「はなしコトバ」の中に現われる、具体的な姿を伴ったことばこそ単語である、と考えていた。氏は、単語に対すこうした考えを発展させ、単語は語いのものと、文法的なものとの統一物であると理論化したのであった。

言語は語いと文法から成り立っている、ということは、言語学ではよくいわれている^⑤。

奥田は、言語は語いと文法とから成り立っているということを、言語は語いの側面と文法的な側面の、両側面の性質を同時に兼ね備えたものとして捉えていた。実はここに奥田文法のカギがあった。氏はこのことを、「言語の音声と意味とを機械的にきりはなすとき、言語は記号になる^⑥」とか、言語は音声（形式）と意味（内容）の統一物である、と表現している。つまり、言語の研究においては、「言語、そして言語のあらゆる部分（要素）をこの音声と意味との統一物としてとらえなければ^⑦」ならないという。言語をこのように捉え、言語の

最も基本的な単位である単語にも、この考え方を押し進めた。従って、奥田は、語意的なもの（意味）と文法的なもの（形式）とを兼ね備えていない単位は、単語と認めないのである。

以上の単語に対する認識から、奥田は、それまでの解釈文法は誤った単語の認定をしていたと主張したのである。

(イ)・動詞論について

奥田は、伝統的文法による単語の認定法の誤りが最もひどい形で反映されているのが、動詞論においてであると指摘している。動詞の四段活用では¹⁸、「《かこう》」「《かかない》」を「《かこ》」と「《う》」とか「《かか》」と「《ない》」といった具合に切り離して、それぞれ一個の独立した単語として認めている。その結果、第一に、基本形「かく」に対して、「かこ」や「かか」の関係と構造とを捉えることができない。第二に、単語における語意的なものとは文法的なものとをそなえていない、誤ったものを単語と認める結果になっていると、指摘している。

論文「単語について」に引き続いて、同年末、奥田は文法書『正しい日本文の書き方』を出している。この文法書は、その前年から、奥田を中心として、鈴木重幸・宮島達夫・野村篤司らによって、民科言語部会の仕事としておこなわれた、「まちがい文なおし」で得られた成果に手を加え、発展させたものであった。「まちがい文なおし」の成果は、おもて表紙も、うら表紙も、白紙でできているガリバンズリのパンフレット（40ページ）にまとめられている。それには、題名がつけられていないが、内容からして文法書である。しかも、「例文はすべて 去年から ことしに かけての 新聞から 取りました。」という「あとがき」のことわりにあるように、具体的な資料に基づき、日本語でまちがいをおかしやすい用法を分類したものであった¹⁹。

さらに当時、奥田は「日本人は日本語のニナイテであって、日本の子どもはアスの日本語のツクリダシテです²⁰」とのべている。この日本語の「ニナイテ」や「ツクリダシテ」をどのように育成するのかということは、教育の問題である。

当時、戦後の経験主義教育のもたらした、子どもたちの基礎学力の低下が全国的な問題になっていたが、奥田は、いくら言語経験を与えても「みについた日本語をりっぱなものにのそだてあげるチカラは、子どもにつきません」、「経験的にまなびとったものを経験的につかうほか、ミチをしりません^②」と、言語活動主義」を批判している。氏は、日本語の「ニナイテ」や「ツクリダシテ」として、日本語の法則を正しく身につけ、明日の日本語を築きあげていくことができる人間像を描いていた。そしてその実現のためには、まず子どもたちが現代日本語を正しく読み・書きできる力をもつことこそ必要であると考えた。しかし、伝統的な国語学に基づく文法論は、教育という現実に対してはまったく無力であった。そこで奥田は、具体的な豊富な資料に基づいて、現代日本語の文法体系をつくりあげてことを提唱した。

文法書『正しい日本文の書き方』は、以上みてきた奥田の認識の上にたって出されたものであった。この文法書は、その書名からもわかるように、書くために役立つ文法書を意図して記述されたものであった。しかし氏が書くために云々というとき、それは解釈文法が、古典を読むための文語文法であるか、または文語文法への「橋わたし」の役割りしか果たして、現代語を読み・書きするためには役立っていないという認識にたっている。そして「きのうのコトバ^③」だけをみつめる、「うしろむきの^④」文法ではなく、「あすのコトバをつくり出すため^⑤」の、「これから話したり、書いたりするため」^⑥の文法こそが大切なのだと強調している。

この書は、論文「単語について」で出した、氏の独自の単語の認定方法に基づいて、現代語の文法を具体的に記述したものであった。氏は、当時、解釈文法では見ることはできなかった文法上の新しいカテゴリーを提出している。特に、形態論の分野でその傾向が著しい。論文「単語について」では、奥田の単語の認定法は、動詞にだけ適用されていたが、この文法書では、名詞、形容詞等他の品詞にも押し広げられている。だが、ここでは、形態論の中で、特に重要な位置を占める動詞に限定してみることにする。

前に見たように、奥田は動詞について、解釈文法でいう助動詞を原則として単語と認めず、動詞内部の文法的な要素と認めている。動詞の「いいきるカタ

＜表 2＞ 『正しい日本文の書き方』のP95～96の活用表に
動詞「あるく」をあてはめたもの

つよいカワリカタ (例あるく)				カワリカタの種類	
ナ ラ ベ	カ サ ネ	マ エ オ キ ② ①	ナ カ ド メ ② ①	カタ チ の ま ま え ミ ト メ カ タ	イ イ カ タ
あるいたり	あるきながら	あるいたら	あるけば あるいて	ミ ト メ	ふ つ う の イ イ カ タ
あるかな かったり	—	あるかな かったら	あるかなければ (あるかなく あるかないで あるかなくて)	ウ チ ケ シ	
(あるき ましたり)	—	あるきましたら	—	ミ ト メ	て い ね い な イ イ カ タ
(あるき ませんでしたり)	—	—	(あるき ませんでした)	ウ チ ケ シ	

提出している。後者は前者に比べ、「トキ」や「キモチ」といった意味をもたないという特徴がある。ここでは活用表だけを記述しておく(＜表 2＞)。

このように奥田が提出したこれらの文法的なカテゴリーならびに活用表は、四段活用論を主張する解釈文法の単語の認定法からは、決して出てくるものではなかった²⁹。

さらに奥田は、解釈文法の流れ、とくに現在の学校文法で支配的な地位をもつ橋本進吉・時枝誠記といった学説の系譜

からは生まれて来ることのない、動詞の「スガタ」(アスペクト)²⁹についても、言及している。

第一に、第二中止形として「いる」(動きの持続している状態)、「しまう」(終了)、「ある」(結果)といった補助動詞を結びつけてつくるつくり方をあげている。第二に、第一中止形に、「はじめる」「つづける」「おわる」「あける」「とおす」「すぎる」等の動詞を結びつけることによるつくり方を、あげている。そし

て、「漢語には、『みる』という意味をあらわすコトバに、『見. 視. 看. 観』などがあるのに、日本語には、『みる』ひとつしかない、といわれることがあります。これはウソです。『みる』をつかって、『みつめる、みあげる、みわたす、みかえす、みおろす』など、いくらでも、スガタ動詞がつくられて、『みる』といううごきのいろいろなスガタがあらわされているのです。」^②と述べている。「スガタ動詞」によって「ゆたかな」^③表現が可能になるわけであるが、そのような「スガタ動詞」が日本語に在ることは、「日本語のよさの一つ」^④であるというのである。

以上、奥田が、①解釈文法とはまったく異質の単語の認定法を生み出したこと、②その認定法に基づいて、現代語の新しい体系を打ちたてたことをみた。

(ウ)・ローマ字文法の影響……宮田幸一を中心に

奥田はローマ字研究にも熱心であった。なぜならば、ローマ字研究・運動は、解決策が異なるにせよ、漢字という日本語の構造になじまない文字をしめだすという点で、カナ文字研究・運動と出発点を同じくするからである。また、氏は、音韻論の研究の上で、ローマ字の使用は不可欠であると認識していたし、文法の研究にとっても、ローマ字がきは、その必然性をもつことを認識していた。ところで、奥田の『正しい日本文の書き方』にみられる形態論上のカテゴリーのたて方は、ローマ字論者、宮田幸一の『日本語文法の輪郭—ローマ字による新体系打立ての試み—』(1948)年から学んでいる。

また、この宮田の文法書は、戦前・戦後を通してローマ字運動に理論的根拠を与えた、田丸卓郎の『ローマ字文の研究^⑤』(1920年初版)の系譜に位置づけられるものである。

以下、奥田とそのグループの形態論上のカテゴリーと宮田のそれとが、基本的に同じであることを、動詞論に限定してみていく。

宮田は自分の文法書を書くに至った問題意識をつぎのように述べている^⑥。

「さて、従来広く行なわれていた日本語の文法体系は日本語の組織そのものにぴったり当てはまっていないところが多いと、わたしはつねづね思っていました。《中略》その最もはなはだしいのは動詞の活用の見方で、今もな

お江戸時代のしきたりをそのまま受けついで、たとえば「書く」という動詞は「書か」「書き」「書く」「書く」「書け」「書け」と活用すると説き、これらの形にそれぞれ「未然形」「連用形」「終止形」などというような名前をつけています。これらの形は五十音順に並べてあって、いかにもきちんとしているように見えますが、その実、一語として独立することのできる形（たとえば「書く」）と一語として独立することのできない形（たとえば「書か」）をごちゃごちゃに並べただけのものであって、決してきちんとしたものではありません。このような説明よりも、もっと言語活動の実際に即した文法体系は打立てられないものか、とわたくしは考えてみました。たとえば、「書く」という動詞の過去形は「書いた」となる。すべて「く」で終る動詞はその「く」を「いた」と置換えることによって過去形を造る。「歩く」は「歩いた」となるし、「たゝく」は「たゝいた」となる。一、とこんなような説明から出発したら、もっとすっきりした文法体系が打立てられはしないか、などと考えてみたのです。」

宮田は、原則として「ローマ字で一と続きに書くもの」を単語として扱っている。そして、従来の文法体系で最もしっくりしないものは、動詞の活用表であると述べている。そこで宮田は、aruku, aruita, arukôなどを、それぞれ単語として、認めている。しかも宮田のこの考えは、動詞をその典型として、他の品詞にも広げられている。

宮田の動詞論には、それまでの文法とは一線を画す、氏独自の文法が示されている。

動詞「あるく」を例にとって、宮田の主張する動詞の主要な活用表を作ると〈表3〉のようになる。

宮田は「本詞」（文末に来て、文の終止を表わす形の動詞を、宮田は「本詞」と名づけている。この「本詞」は、後でみる「分詞」と対立するものである）を、五つの活用形に分類している。（〈表5〉参照）

①の aruku と②の aruita は主に事実を表わすので、「叙実本詞」と名づけている。③の arukô と④の aruitarô は主として「想意」（「意志や推量」の意）を表わすので、「叙想本詞」と名づけている。

伝統文法の活用形

おもな用法	歩く	基本の形
	ある(歩)	語幹
連なる ナイに	— か	未然形
マス 連なる	— き	連用形
言い切る	— く	終止形
トキ 連なる	— く	連体形
バ 連なる	— け	假定形
で命令の 言い切る意味	— け	命令形

<表 4> (『中等文法 国語』
文部省 1947 25年頁参)

原 型	aruki
本 詞	
① 現在形	aruku
② 過去形	aruita
③ 現在叙想形	arukô
④ 過去叙想形	aruitarô
⑤ 命令形	aruke
分 詞	
① シテ分詞	aruite
㊦ シナガラ分詞	aruki-nagara
㊦ シツツ分詞	aruki-tutu
㊦ スレバ分詞	arukeba
㊦ シタラ分詞	aruitara

<表 3>

本 詞	叙 実 本 詞 (事実を表わす)	① 現在形——aruku
		② 過去形——aruita
	叙 想 本 詞	③ 現在叙想形——arukô
		④ 過去叙想形——aruitarô
		⑤ 命 令 形——aruke

<表 5>

				基本態（普通のいい方）		シマス態（ていねいなお方）	
				肯 定	否 定	肯 定	否 定
本 詞	叙 述 本 詞	〔事実を表わす〕	現在形	aruku	arukanei (arukanu)	arukimasu	arukimasen
			過去形	aruita	arukanakatta	arukimasita	arukimasen- desita
	叙 想 本 詞	〔意志・推量を表わす〕	現在叙想形 イシ スイリョウ	aruko	arukô (arukumai) arukanaidaro	arukimasyô arukudesyô	(arukimasumia) arukanaidesyô
			過去叙想形 スイリョウ		arukitarô arukanaka- ttarô	aruitadesyo	arukanaka- ttadesyo
	命 令 形			aruke	arukuna	arukinasai	—

<表 6>

分 詞	状態分詞	シテ分詞	aruite
		シナガラ分詞	aruki—nagara
		シツツ分詞	aruki—tutu
	条件分詞	スレバ分詞	arukeba
		シタラ分詞	aruitara

<表 7> 『日本語文法の輪郭』 P48～49

また、①～⑤の活用形は、普通のいい方であるが、宮田はこれを「基本態」とよんでいる。そしてこの「基本態」に対するものとして、ていねいなお方である「シマス態」が存在するとしている。

さらに「基本態およびシマス態の各活用形はどれも肯定の形であるが、これにそれぞれ対応して、一定の否定の形がある^⑧」とする。

宮田のいう、「基本態」・「シマス態」・「否定」の形を、<表 5> を基にして活用表をつくと <表 6> のようになる。

			基本態（普通のいい方）		シマス態（ていねいなお方）	
			肯 定	否 定	肯 定	否 定
分 詞	状 態 分 詞	分シ 詞テ	aruite	arukanaide arukanakute	arukimasita	arukimasende
		分シ ナ ガ 詞 ラ	arukinagara	—	—	—
	条 件 分 詞	分シ ツ 詞ツ	arkitutu	—	—	—
		分ス レ 詞バ	arukeba	arukimasureba arukeba	arukimasureba	—
		分シ タ 詞ラ	araitara	arukanaka ttara	arukimasitara	—

<表 8>

		基本態（普通のいい方）		シマス態(ていねいなお方)	
		肯 定	否 定	肯 定	否 定
動詞 の 原 形	中 止 的 用 法	aruki	arukazu	—	—

<表 9>

以上、宮田の動詞論の「本詞」についてみたわけだが、〈表 6〉の活用表は、奥田が提出した動詞「いいきるカタチ」の活用表と、基本的に同じであるといえる。宮田の活用表を時計回りに90度回転させると、活用表の形式も同じになる。

宮田は、過去叙想形の推量として、（奥田の活用表ではオシハカリのスギサリの形）古代語の完了の接尾辞「たり」の推量「たふむ」からきた「tarô」をあげている。これに対し、奥田はむすびのくつつきである「た」に、推量の「だろう」を合わせた形を優先させている。それは、「あるいたろう」という用法よ

		基本態（普通のいい方）		シマス態（ていねいないい方）	
		肯 定	否 定	肯 定	否 定
動詞の原形	中止的用法	aruki	arukazu	—	—
分 詞	状 態 分 詞	分シ 詞テ	aruite	arukanaide arukanakute	arukimasite arukimasende
		分シ ナ ガ ラ	arukinagara	—	—
	条 件 分 詞	分シ ツ 詞ツ	arukitutu	—	—
		分ス レ 詞バ	arukeba	arukanakereba arukaneba	arukimasureba —
		分シ タ 詞ラ	aruitara	arukanaka- ttare	arukimasitara —

<表10>

りも、「あるいだらう」という用法の方が、今度日本語の発達史からみて、より発展していくことばとして考えているからであろう。

つぎに宮田の「分詞」をみる。（宮田のいう動詞の「分詞」とは、「本詞」に対立するものである。「本詞」が終止的に用いられるのに対して、連用的に用いられているものを指す。）

<表3> でみたように、宮田は「分詞」を㊶～㊸の五つの活用形に分類している。氏は㊶の aruite ㊸の aruki-nagara、そして㊷の aruki-tutu を「状態分詞」、㊶の arukeba と㊸の aruitara を「条件分詞」と名づけている。分詞のこれらの関係について、宮田は<表7>のよう示している。

宮田は、動詞の「本詞」と同じように、「分詞」にも、「基本態」に対して「シ

マス態」が、「肯定の形」に対して「否定の形」が存在するとする。〈表7〉を基に、氏の主張する「分詞」の活用を表にすると〈表8〉となる。

また、「動詞の原形」の章を設けているが、その中で「中止的用法を位置づけている。氏の「中止的用法」とは、つぎの yomi といった用法のことである^④。（一種の句の中で使用され、中止的な働きを示している。）

Ane wa hon o yomi, imôto wa tegami o kaita.

さらに氏は、この「中止的用法の原形には否定の形がある」^⑤とする。その形は「否定の現在形の終りの nai または nu を取って、その代りに zu をつけたものである。」^⑥という。したがって、arukanai, arukazu となる。これを表にすると〈表9〉のようになる。

以上、宮田の動詞論の「分詞」と「動詞の原形」の「中止的用法」についてみてきた。

さて、宮田の〈表8〉と〈表9〉を合わせたものは〈表10〉となり、それは、奥田の「つづけるカタチ」〈表2〉の動詞の活用表と、基本的に同じものである。〈表2〉では、「ナカドメ」の形（中止法）の内容を、現代語では使われなくなったもの（書きことばには使用されている）を①とし、普通よく使われているものを②として区分している。宮田は、奥田が①の用法は現代語では使用されないということを、「それ自身一種の句を造っている^⑦」という表現でのべている。そして分類としては、「動詞の原形」の章の中で①を位置づけている。奥田の②の用法は、宮田の「状態分詞」の「シテ分詞」に相当するものである。

「マエオキ」の形（条件形）について、奥田は「条件」を表わす場合と「仮定を表わす場合とについて挙げているが、氏は、「条件」の方を基本をなすものおさえ、「仮定」も一種の「条件」をなすものと見なしている。氏は「マエオキ形」を①と②とに区分しているが、前者は、宮田の「条件分詞」の「スレバ分詞」に相当し、後者は、宮田の「条件分詞」の「シタラ分詞」に相当するものである。（宮田はその他に「条件分詞」として、「シツツ分詞」をあげている。）

奥田の「カサネ」の形（副動詞形）は、宮田の「状態分詞」の「シナガラ分詞」に相当するものである（奥田はその他に「ナラベ」の形＝例示形をあげている。）

奥田が動詞の「つづける形」として出したカテゴリーと、宮田が動詞の「分詞」として、また、「動詞の原形」の一部として出したカテゴリーとは、そのほとんどが対応していることを見た。

宮田の「分詞」動詞のカテゴリーと「動詞の原形」の「中止的用法」を、奥田は、動詞の「つづけるカタチ」という形式のもとにひとまとめにしているのだが、この差異はさ程重要なことではない。なぜならば、「つづけるカタチ」としてあげられている「ナカドメ」「マエオキ」「カサネ」「ナラベ」の間に、「共通する特徴としては、いいおわる形ではない（きもち、ときの意味をもたない）という消極的なものしかみとめられない³⁹⁾」からである。（『にっぽんご4の上』ではこれらの形はひとまとめにしては扱っていない。）

宮田の活用表〈表10〉では、「動詞の原形」と「分詞」を縦の軸に、「態」を横の軸にとって、活用表を作っている。この表を、時計回りに90度回転させると、奥田の「つづけるカタチ」の活用表と形式も同じものとなる。

奥田は、言語はそのものの中に構造を持つことを主張するのであるが、文法研究においても、それを意識している。そのような意識なくしては「ミトメ」に対して「ウチケシ」、「ふつうのイイカタ」に対して「ていねいなイイカタ」「スギサリ」に対して「スギサラズ」といった、対立関係概念は生まれず、奥田の活用表も出てこないのである。宮田も、やはり「対応」ということばでもって、「肯定」に対して「否定」を、「基本態」に対して、「シマス態」を、「現在形」に対して「過去形」を対立させているのである。

以上、宮田の「本詞」、「分詞」のカテゴリー、並びに活用表は、奥田の「いいおわるカタチ」「つづけるカタチ」のカテゴリー、並びに活用表と同じものであることをみた。

宮田は、「私はローマ字で一と続きに書くものを原則として一語と取扱うことにしたい。」⁴⁰⁾として、伝統文法の系譜からはみい出すことのできない口語文法を展開し、新しい文法体系を出した。だが、宮田は「なぜ、ローマ字で *saki-masita* なら *sakimasita* を一と続きに書くか、といわれると答えるのはむずかしい。」⁴⁰⁾として、単語を理論的に規定するまでには至らなかった。

わが国の文法理論の発展の筋道としては、宮田が素朴な形で出した単語の認

定方法に、理論を与えたのが奥田であった。しかし、奥田は形態論上の具体的なカテゴリーを立て、体系づける際、宮田の考え方に学んだのだった。

4. おわりにかえて

奥田とそのグループが、本格的に文法研究を展開する上で直接の機動力となったのは、国語・国字問題、教育の問題、そして民族独立の問題であった。

国語・国字運動には、日本語の民主化・大衆化という理念がもりこまれていた。そしてこの発想は、現実の言語生活に役立つ文法学の創造へと発展した。

また、奥田は、国語教育の課題は、日本語の「ニナイテ」や「ツクリダシテ」を育成することであると認識していた。氏の、日本語の「ニナイテ」や「ツクリテ」を育成するということは、日本語を正しく理解し、それをよりすぐれたものへとつくりあげていく主体を育成することであった。そのためには、まず子どもたちに正しく読み・書きができるようにさせることであった。ところが、解釈文法に基づく学校文法にそれは期待できなかった。そこで奥田は、現代語の多くの資料に基づいて、事実に則した文法体系をつくりだすことを主張した。

さらに、民族の危機への直面は、奥田に、文法学と教育、そして民族との問題をきり結んで捉えることをせまった。そこで奥田は、「国語学は日本の言語の法則をあきらかにして民族の言葉をまもり、そだてるたたかいのみちびきにならなければならない。国語教育は日本の言語の法則を子どもにおしえて、民族の言葉をまもり、そだてるたたかいの舞台にならなければならない^①」という認識に至った。

以上のように問題意識のもとに、奥田はまず単語の問題をとりあげたのである。

奥田は新しい単語の認定法を打ち出すことを通して、新しい形態論の体系を出した。この単語についての理論づけは、奥田独自のものであった。しかし文法体系を構築する上では、ローマ字文法の研究の蓄積から学んだのだった^②。

現行の学校文法における動詞の扱い方の基本的部分をしめるのは、五段活用論であるがこれは明治以前に成立している。明治になって、ヨーロッパの文法

理論が入ってきた際、どのような文法の組織づけをするのかということが問題とされた。つまり、それまでの国学の成果をそのまま取り入れるのか、またはヨーロッパの文法学を取り入れるのかといった問題である。ヨーロッパの文法論に基づき、日本語の文法論の組織づけに成功し、近代日本における文法研究の出発点に位置するのが大槻文彦である。氏の文法は、国学の成果とヨーロッパ文法の折衷だといわれる。氏は国学の成果である助詞、助動詞を単語として認めた。そして活用表を動詞の「法」(mood)による変化と認めた。この大槻の考えは、橋本へと引きつがれ今日に至っている。

奥田は、まさに明治期いらい、日本の文法学会、文法教育界が今日まで引きつづけてきた問題に対して、根本的な疑問を投げかけたのだった。

奥田の単語の規定にもとづく日本語の形態論の体系化によって、その内容を構造的に扱うことが可能となった。また、学校文法では説明のつかなかった形態論上の諸現象を扱うことも可能となった。

一例をあげるならば学校文法では、非実体的なものを単語とみなす。そのこととかかわって、語と語の接続関係が重視される。たとえば「ナイ」に連なる形を未然形とよぶ、というように。ところが、なぜ未然形とよぶのかを説明していない。このことは、連用形、連体形その他の接続についても同様である。したがって、生徒は「ナイ」に接続する形を未然形とよぶのだと暗記しなければならない。さらに学校文法では活用形相互間の関連について構造的に捉え、説明することは不可能である。ところが奥田の単語の規定にしたがえば、単語は具体的な姿であられる。したがって、接続法を暗記する必要はなくなる。しかも、動詞「あるく」を例にとるならば、(1)「あるく」は「あるこう」「ある」けと、ムード(気もち)のカテゴリーの上で対立関係にある。つまりあるくが、のべつたえるという文法的な意味をあらわしているのに対して、「あるこう」「あるけ」が、さそいかけ、命令をあらわしているのである。(2)また、「あるく」は、「あるいた」とは、ムードのうえではつたえるという意味では同じカテゴリーに属するが、しかし、その内部では対立して、テンスのカテゴリーの上で対立関係にある。「あるく」は、この対立にあってはすぎさらずの形なのである。(3)そしてまた、「あるかない」という否定動詞にたいしては、「あるく」

の肯定の動詞であって、みとめ方というカテゴリーの上で対立関係にあるのである。さらに、「あるきます」というていねいな動詞に対立して、ふつうの動詞であって、ていねいさというカテゴリーの上で対立関係にあるのである。これらの対立関係は、奥田文法の体系を形造っているほんの一例にしかすぎないわけだが、奥田の構造的な捉え方は、科学的であるということにおいて、わかりやすいということを内在させている。

さらに、文法用語がやさしい。

以上のことは、小学校からの体系的な文法指導を可能にした。このことは、豊かな日本語を子どもたちに与えるという、教育の問題にとっては意味深いことである。

この小論では形態論（とりわけ動詞論を中心に）に限定して、その原形の形成過程について論じた^②。しかし「はじめに」で述べたように、教科研の文法理論の領域には形態論のほかに連語論・構文論があるが、それらの分野については他の機会に論及したい。また、これらの文法理論が、教科研の文法理論として受け入れられるためには、1950年代の学力低下の問題と結びついた、国語科の固有の任務をめぐる論争を経なければならなかった。この論争についても別の機会に論及したい。

註「1. 教科研文法理論の温床……民主主義科学者協会言語科学部会の学風」の註

① 『民科科学年鑑』1948年 249頁参照。

② 「われわれわ新らしい言語科学をきずきあげ、日本民族の民主的言語生活をうちたてるための理論を確立し、それにもとづいて民主的な文化運動として言語運動として言語運動をおしすすめていかなければならない。」（『民族科学年鑑』1947年）258頁。

③ 「とくに国語学においてわ、戦争中に推薦された時枝誠記の観念論的な国語学説が支配的である。わが国の当面する民主的な日本語変革の問題にたいするこの理論の消極的な点からも明らかなように、それは言語問題における保守的な勢力のより所となっている。」（同上）159頁。

④ スターリンは言語という用語を使用しているが、内容からして、民族語とも共通語とも国語とも置きかえられる。ここでは、国語と置きかえた。

⑤ 『イ・スターリン 言語学におけるマルクス主義についておよび右論文への質問に対する回答』（言語問題研究会 出版年度不明）12頁。

⑥ 時枝誠記「スターリン『言語学におけるマルクス主義』に関して」（『中央公論』1950年秋季特別号）104頁。

- ⑦ 同上 104 頁.
- ⑧ 時枝誠記『国語研究法』三省堂 1947年 91頁.
- ⑨ 民主主義科学者協会東京支部研究委員会編『民科研究ニュース 臨時特集No.1』1950年10月. しかし古在は、当日は発熱のため欠席している.
- ⑩ 寺沢恒信「スターリンの言語論をめぐって」(『文学』1951年2月号) 57頁.
- ⑪ たとえば大久保は、日本語の単語は「概念」を、文は「判断」を表わすと規定する. これは日本語というある特性をもった民族語を、あらゆる言語に普遍的な性格をもつ論理学上のカテゴリーや概念で解決しようとするものである. また時枝は、単語認定の根拠を、「質的統一体」という、「主体的意識」において認定された全体概念に求めている.
- ⑫ スターリン論文を批判した三浦つとむは、民科芸術部会に属していた.
- ⑬ 石母田正『続 歴史と民族の発見一人間・抵抗・学風』東京大学出版会 1974年13刷 165 頁.
- ⑭ 同上 165 頁.
- ⑮ 奥田靖雄、鈴木重幸、宮島達夫、野村篤司といった人たちは、1950年の春から言語部会に出席している. 1951年10月には奥田と野村は、当時部会の指導的位置にいた大島義夫(ペンネーム高木弘…ブィコフスキー著『ソヴェート言語学』の訳者)と共に、部会の機関紙『コトバの科学』の編集委員となっている(『コトバの科学第5号』民科言語部会 1952年1月20日参照). また同じ月に、奥田、野村、宮島は、大島、大久保忠利その他6名と共に、部会の運営委員に選出されている.(同機関紙参照). 当時、奥田は30を越えたばかりであり、野村、宮島、鈴木はまだ東大の学生であった.

「2. 奥田靖雄の言語観」の註

- ① 時枝誠記『国語学原論』岩波書店 1977年第31刷 53頁.
- ② 同上 51頁.
- ③ 同上 51頁.
- ④ 同上 53頁.
- ⑤ 民主主義科学者協会言語科学部会『コトバの科学』第4号 1951年11月号 6 頁.
- ⑥ 同上 7 頁.
- ⑦ 同上 7 頁.
- ⑧ 同上 8 頁.
- ⑨ 同上 8～9 頁.
- ⑩ 民主主義科学者協会言語科学部会『コトバの科学』第6号 1952年3月号 5 頁.
- ⑪ この論文をさかいとして、たとえば「起因している」「詳細に」「所謂」「…のごとく」「…せしめる」「かくして」といった表現は、なくなっている.
- ⑫ 奥田靖雄「日本における言語学の展望と反省」(民主主義科学者協会言語科学部会編『言語問題と民族問題』, 理論社, 1952年) 117 頁.

- ⑬ 同上 120 頁.
- ⑭ 同上 120 頁.
- ⑮ 同上 120 頁.
- ⑯ 同上 120 頁.
- ⑰ 同上 121 頁.
- ⑱ ソシユール『一般言語学講義』小林英夫訳 岩波書店 1977年第5刷 28頁.
- ⑲ 前掲『コトバの科学』第6号 7頁.
- ⑳ 前掲「日本における言語学の展望と反省」122 頁.
- ㉑ 同上 122 頁.
- ㉒ 同上 122 頁.
- ㉓ 同上 122 頁.
- ㉔ 同上 128 頁.
- ㉕ 同上 121 頁.
- ㉖ 同上 129 頁.
- ㉗ 同上 129 頁.
- ㉘ 民主主義科学者協会言語科学部会『コトバの科学』第5号 1952年1月 6頁.
- ㉙ 前掲「日本における言語学の展望と反省」124 頁.
- ㉚ 同上 128 頁.
- ㉛ この「国民的科学」という用語には、当時、民科がかかげていた「国民的科学」というスローガンを、奥田が、自分の課題として受け止め、言語学と民族の独立と解放の問題を、きり結び把えようとしていた姿勢がうかがえる.
- ㉜ 前掲「日本における言語学の展望と反省」128 頁.

「3. 教育科学研究会の文法理論の形成——奥田文法理論の出発」の註

- ① 奥田靖雄「単語について」(『新しい教室』第8巻第8号, 中教出版, 1953年8月)
- ② この書によって、四段活用論が一応整理されたとされている.
- ③ 『言海』の巻頭に載せられている. そこでは、「動詞の活用は『四段』『上二段』『上一段』『下二段』(以上正格)と『加行』『左行』『奈行』『良行』の各変格とに分け、『下一段』を『下二段』の『変態』とする。」とされている.
- ④ 「一体『単語』とは何か、という問いは、文法研究・言語研究にとって、最大の難問の一つである. その難しさの程度は、『文』とは何かという問いの難しさに匹敵する」(渡辺実「品詞分類」(『岩波講堂, 日本語6, 文法I』岩波書店, 1976年)90頁.
- ⑤ 「はだかの動作をしめす動詞は、ことばのなかには、どこにもない. はんたいに、動作をしめすことなしに、動作のありかただけをしめす単位(日本語文法の助動詞),つまり資料なしのまじりけのない文法的かたちも、ことばとしては、ありえない。」(奥田, 前掲「単語について」)31頁.
- ⑥ 奥田, 前掲「日本における言語学の展望と反省」124 頁.

- ⑦ 奥田靖雄「民族解放と日本語—漢語の問題をめぐって」『美しい国語・正しい国字』河出新書, 1954年, 55頁.
- ⑧ 藤村三郎(奥田靖雄)「民族解放と日本のコトバ」『国語問題の現代的展開, 理論別冊学習版・第Ⅳ集』民主主義科学者協会言語部会監修, 理論社, 1954年, 38頁.
- ⑨ 奥田, 前掲, 「民族解放と日本語—漢語の問題をめぐって」, 50頁.
- ⑩ 奥田靖雄『正しい日本文の書き方』(春秋社, 1953年12月)の「文字のかきかた」の部には, こういった例が教多くあげられている.
- ⑪ 奥田, 前掲「単語について」28頁.
- ⑫ 同上 30頁.
- ⑬ 当時, スターリンも, 言語の主な構成要素として, 語いと文法をあげているこの考えは, 大きな反響をよび, 日本の伝統的な国語学に批判的な言語研究者は, さかんに語いと文法の問題をとりあげた. また, 言語は語いと文法とから成り立っているという考えは, 当時の民族独立と平和の教育, そして学力低化の問題と結びつけられて, 国語の教育内容の考え方にも大きな影響を与えたのであった. たとえば 国分一太郎は, 国語教育の固有の任務は, 民族語としての日本語の語いと文法(とりわけ文法)を教えることにある. と主張し, 民間側の教育論争として重要な意味をもつ, 「国語教育の本質をめぐる論争」を, 石田宇三郎との間に起こしている.
- ⑭ 奥田, 前掲「日本における言語学の展望と反省」118頁.
- ⑮ 奥田靖雄『国語科の基礎』(むぎ書房, 1970年)10—11頁.
- ⑯ 四段活用も五段活用も, 本来同じことである. 仮名づかいの差から生まれた区別にしかすぎない. つまり, 戦後, 歴史的仮名づかいに代わり現代仮名づかいが制定された結果, それに合わせて五段活用が考え出された.
- ⑰ この仕事は, 進歩的な新聞・雑誌などにおける表現上の書き誤りを指摘し, 正すことを通して, それらを著述したり出版したりする者に, 正しく・やさしい日本文を書くことを勧め, その結果, 進歩的な思想が広く日本の人民に理解され, 広まっていくことを意図しておこなわれたのであった. また, このパンフレットで注意を引くことは, 奥田を中心とするグループが, この頃からすでに, いちいちの品詞について説明を展開する際, 『にっぽんご』シリーズにみられるように, 「規定を設け, 実例をあげ, さらにそれを実際の言語活動に活用するという, 分析・総合, そして実際への適用という研究の方法をとっていることである.
- ⑱ 奥田靖雄「文法の指導『教育』教育科学研究会 1953年11月特大号 36頁.
- ⑲ 同上 28頁.
- ⑳ 奥田, 前掲『正しい日本文の書き方』8頁.
- ㉑ 同上 8頁.
- ㉒ 同上 8頁.
- ㉓ 同上 8頁.
- ㉔ 同上 8頁.
- ㉕ <表4>における活用表参照.

- ②⑦ 伝統文法では、助動詞を、奥田のいう動詞から切断して独立の単語とする。そして文法的な意味は前者が受け持つと考える。従って、「みている」「みてしまう」のような分析形は、単位としては出てくることがない。
- ②⑧ 奥田、前掲『正しい日本文の書き方』98頁。
- ②⑨ 同上 98頁。
- ③⑩ 同上 98頁。
- ③⑪ ローマ字文法で、日本語の単位である単語を初めてうきぼりにしたのは、田丸卓郎である。氏は「*kaku, yomu* などは勿論、漢語で出来た *kenkyusuru, hunpatusuru* などもそれぞれ只一つの簡単な考を表はすから、皆一つの動詞と見て、一つにつづけて書く。」(『ローマ字文の研究』1932年版, 120頁)と述べている。そして、「*mita*」のようなものを、「『助動詞』と云ふ別の扱ひにするのは便宜ではなくて、寧ろ語尾変化とするが適當である。」(同書, 126頁)とのべている。田丸と宮田との相違点の一つとして、田丸には意味・論理の側面に力点を置いて文法をまとめあげようとする一傾向が見られる。その傾向は、氏が、「動詞固有の変化」として「12種」(同書, 124頁)を提示するやり方においても見い出される。
- これに対して、宮田はむしろ形式の側面から文法をまとめあげようとする傾向が強い。
- ③⑫ 宮田幸一『日本語文法の輪郭—ローマ字による新体系打立て試み—』三省堂, 1948年, まえがきⅧ~Ⅸ頁。
- ③⑬ 同上 40頁。
- ③⑭ 同上 61頁。
- ③⑮ 同上 62頁。
- ③⑯ 同上 62頁。
- ③⑰ 同上 61頁。
- ③⑱ 鈴木重幸『日本語文法・形態論』むぎ書房, 1972年, 329頁。
- ③⑲ 宮田、前掲『日本語文法の輪郭—ローマ字による新体系打立ての試み』13頁。
- ④⑩ 同上 14頁。

「4. おわりにかえて」の註

- ① 奥田靖雄「文章の書き方」『教育』教育科学研究会, 1955年6月号, 28頁。
- ② 文法学説史をかえりみるならば、ローマ字文法とは別の流れで、すでに明治から山田孝雄の助動詞否定説、松下大三郎の助詞・助動詞否定説が出されている。かれらの文法理論は、学校文法としては認められなかったものの、学問的にはきわめて高く評価されている。奥田が自分の単語の認定法をうち出す際、かれらの存在ははげましになったにちがいない。
- ③ この後、奥田らは、松下大三郎、佐久間鼎、金田一春彦たちの研究の積極面を引きつぐことにより、またソヴィエト言語学を導入することにより、さらには教育実践にきたえられながら、形態論の内容をより充実させていくことになる。